『十代の望まない妊娠防止対策に関する研究』

Ⅲ．十代の望まない妊娠対策に先進的な国々における、教育媒体の収集と活用法に関する研究査

鈴木　良一　　家族計画国際協力財団・ジョイセフ（東京都）
北村　邦夫　　（社）日本家族計画協会クリニック（東京都）

１．はじめに

（１）思春期を理解するために[1)]

１９９４年４月５日、国際的家族計画運動の民間公益団体である国際家族計画連盟（ＩＰＰＦ）の当時の事務局長であったハーフダン・マーラー氏（前ＷＨＯ事務局長）が、ニューヨークの国連本部で『思春期を理解するために（"Understanding Adolescents---An IPPF Report on Young People's Sexual and Reproductive Health Needs"）』と題した報告書を発表した。思春期の若者や未婚の男女に対する出産、妊娠及び、家族計画サービスに関して、世界各国の政府は必ずしも積極的であるとは言い難いとして、マーラー氏は、「毎年世界中で、15歳から19歳の少女２億５千万人のうち１５００万人が妊娠出産を経験し、これとは別にさらに５００万人が人工妊娠中絶を経験している。」と発表した。それは、15歳から19歳の少女の約８％が毎年妊娠していることになる数字である。十代の妊娠は、①女性の身体が充分に発達していないため、さまざまな疾病を生じやすい、②十分な産前のケアも含めた適切な医療や保健指導を受ける機会が少ない、などの理由で、ハイリスク妊娠となりやすく、それが15歳から19歳の少女の死因のトップともなっている。また、少女の妊娠出産が多い理由として、報告書は開発途上国での、①結婚年齢が低いこと、そして、②社会の変動にともない性意識が変化していること、の二つをあげている。

また、女性が教育を受ける機会が広がったことから世界的に結婚年齢は高くなる傾向にあるが、それでも、アジアの女性の１８％、アフリカの女性の１６％、ラテン・アメリカの女性の８％は１５歳以下で結婚しており、極端な例では、バングラデシュでは１２歳で

結婚が認められ、８０％の女性が２０歳までに出産を経験しているという国もある。

また、報告書は、「社会の変化は家庭のきずなを弱めるとともに、婚前交渉に歯止めをかけていたような伝統的習慣を崩壊させることにもなった」と指摘し、マスメディアも人々の性行動に対する態度の変化に影響を与えたとしている。

十代の妊娠は途上国だけの問題ではなく、米国でも毎年１０万人以上の少女が妊娠し、うち４５万人が中絶している。

さらに、性感染症（ＳＴＤ）のリスクも高く、世界保健機関の推定では、世界の若者の２０人に一人が何らかのＳＴＤに感染しているという。また、貧困などの理由による売春、性的虐待など思春期の性の問題は山積している。

報告書は、こうした結果をもとに、各国政府に十代の若者を対象にした性と妊娠に関わる保健対策と家族計画（避妊）政策の重要性を訴えるとともに責任を果たすことを強く呼び掛けた。

（２）思春期に与えるエイズの影響[2)]

国連人口基金（ＵＮＦＰＡ）のヒュー・オヘアは、同基金の「エイズ特集号」で、エイズの影響として大きなものは、

①乳幼児や若年層の死亡率を上げるため、平均余命が短くなることと、

②生産年齢人口が減少することで経済が停滞してしまうことである

と指摘している。また、

③若年層、働きざかりの人口、特に女性の人口が減ることが孤児の増加を促し、大きな社会問題が起こるであろう

と予測している。さらに、決め手となる治療・予防法がない現状で、エイズの拡大を防ぐには、エイズに関する情報を広めることで性行動そのものを変える一方、コンドームの使用を呼び掛けるしかない。言い換えれば、研究者、政府、国際機関、民間が一致協力して、家族計画とエイズのインテグレーションを図ることであるとしている。

また、世界的にみて、エイズによる女性の死亡率がますます増加しているとも指摘している。ＷＨＯによれば、新たに感染した患者の半数近くが女性であるという。１９９３年には１００万人を超える女性がＨＩＶに感染しており、この数は西暦２０００年までに１３００万人以上に達し、そのうち４００万人は死亡すると予測されている。無防備な男女によるセックスが、依然としてエイズ拡大の最大の原因であるとＷＨＯの調査は示している。さらに、女性が、

①社会経済面で不平等や依存を強いられていることと、

②性的な面で男性に従属的であること、

が女性の感染率増加の二つの原因であると付け加えている。

十代の女性に対する、適切なＳＴＤ／ＨＩＶ／ＡＩＤＳ予防に関する予防教育と十代の妊娠予防に関する適切な指導が望まれるとともに男性教育の必要性も指摘された。

（3）国際人口開発会議（ＩＣＰＤ）での思春期対策への提言[3)]

ＩＣＰＤにおける重要な課題として思春期に対するリプロダクティブ・ヘルスや家族計画サービスを提供すべきか否か、また提供するとしたら、どのような状況の者に提供するかが議論された。十代の妊娠は世界中の至るところで大きな問題となりつつあり、その多くは望まない妊娠であり、またその殆どが計画された妊娠ではない。「行動計画」では、青少年が責任ある決断を下すために、リプロダクティブ・ヘルスに関する情報やサービスの提供を受ける権利を有すると認め、特に性教育やカウンセリングサービスを通じ、青少年が自らの性について理解し、望まない妊娠、ＳＴＤや不妊症に陥る危険から自らを守ることを提案している。「行動計画」は適切なリプロダクティブ・ヘルス・ケア・サービスやカウンセリングの提供、責任ある健全な性行動の推進により、青少年の妊娠を大幅に減少させようとしている。中でも、特に、各国の実施する計画や、その計画を青少年に提供する者の態度により、青少年の必要としているサービスや情報に制限が加えられてはならないと強調された。

「思春期の若者のリプロダクティブ・ヘルスに関する問題（性行動、望まない妊娠、安全でない中絶、ＳＴＤなど）への取り組みが必要であるし、そのために親の監督責任を踏まえ、プライバシーを尊重しつつ思春期の若者に対してリプロダクティブ・ヘルスのためのサービスが提供されるべきである」と提言している。この世界的同意は、十年前の人口会議を知る者にとっては、驚異的なスピードで世界の問題意識が高まったことを物語っていることがわかる。つまり、どうしたらいいのだろうかという段階ではなく、行動の段階へと世界の全ての国々が入ったという同意事項に他ならないのである。

（4）十代の少女の妊娠・出産に関する死亡率[4)]

世界銀行が１９９５年５月の「母の日」にちなみ、十代の少女が妊娠・出産で死亡する割合が成人女性よりもはるかに高いとする調査結果を発表した。この傾向は、開発途上国で深刻で、世界は避妊教育の普及や極端な早婚の抑制策などの対策が必要であることを指摘している。世界銀行によると、十代の少女が出産する子供は、中国、インド、バングラディッシュ、ナイジェリアなど人口の多い国８カ国の合計で毎年８５０万人に上る。１８歳未満の少女の場合、出産による死亡率は１８歳から３４歳の女性に比べ２～５倍も高くなるという。

こうした少女の出産背景として、

①女性の社会的地位の低さ、

②避妊知識の欠如等

があると指摘している。死亡する割合の高い点については、「母親になるのが早すぎたための悲劇もある」としている。また、避妊

を知らないことが十代の少女のＨＩＶ感染者を急速に増やしているとも警告している。

（５）３億３３００万人がＳＴＤに感染[5)]

世界保健機関の１９９５年８月２５日の発表によると、毎年少なくとも３億人以上がＳＴＤに感染していると推計している。ＳＴＤに今年一年で感染するケースの予測で、最も多いのがトリコモナス症で１億７０００万人、クラミジア感染症８９００万人、淋病６２００万人、梅毒１２００万人。この４つのＳＴＤだけで計３億３３００万人に達する。これは、世界の１５人に１人がかかる計算になる。ＨＩＶ／ＡＩＤＳもその深刻の度合いを増幅している。

（６）年間１３０万人の女性が妊娠・出産・中絶にともなって死亡[6)]

米国・ＮＧＯであるポピュレーション・アクション・インターナショナルが、１９９５年７月２４日に発表したリリースによると、開発途上国を中心に年間１３０万人の女性が妊娠や人工妊娠中絶（闇中絶が多い）、出産に伴って死亡していると発表した。女性が死亡する率はアフリカで際立って高い。

（７）わが国の取り組みへの提言として

このように、世界の十代の若者を取り巻く環境は、十代妊娠やＳＴＤの部分を見ただけでもその深刻度を増してきているといえる。わが国の状況も、他の章で述べているように、この問題の深刻さは加速している。

１９９４年の優生保護統計によれば、２０歳未満の中絶件数は、２７、８３８件と前年の２９、１９３件、さらには１９９１年の３３、２８６件をピークとして減少してはいるものの問題の本質は一向に変わっていない。十代の望まない妊娠、また、それにまつわる諸問題も見逃すわけにはいかない。

世界の現状は、前述したように、油断のできない状況であり、問題としてより深刻度の強い国々の取り組み、それは先進国だけでなく開発途上国での取り組みであっても、必ずわが国に対する教訓になるとともに、学ぶべきことが多いことに気がつく。それらを行政の提言としてまとめることが本章の目的でもある。

具体的には、家族計画国際協力財団（ジョイセフ）の国際協力活動を通して収集できた「十代の望まない妊娠防止対策」に積極的に取り組んでいる主要国の視聴覚教材などを分析するとともに、わが国での活用について検討し、さらに、各地域で実施された思春期保健のワークショップやセミナーなどでの取り組みのいくつかを紹介し、現場からの提言としてまとめるものである。

換言すれば、わが国の状況は世界の多くの国と比較すると、問題となる統計、例えば人工妊娠中絶率、十代の妊産婦死亡率、十代妊娠での乳幼児死亡率、十代の性行動などをどれをとっても世界的には低位置にあるが、今

後の趨勢においては予断をゆるさないと考える。世界の状況を、他山の石、対岸の火事と考えることは、この国際化された社会の変容の中では楽観的に過ぎる。また。現実に、十代の望まない妊娠の結果として、彼らの人生に及ぼす身体的、精神的、社会的な各種後遺症について考えるとき、行政と学会及び民間の協力体制を万全にした上での、積極的な取り組みが必要となってくる。昨今のエイズの状況、ＳＴＤの静かな、しかし、着実な世界的な広がりは、この問題に取り組む多くの国々の対策に拍車をかけている。実は、時間的な余裕などなく、如何に早期に実際的な対策を打つか、また、具体的な予防のための指導、相談、教育啓蒙活動を充実させるかが、今緊急的な国際課題となっている。国連機関、各国政府、民間機関のそれぞれの取り組みは大変な勢いで、「避妊教育」及び「性を通しての人間教育」の二つの柱の統合（インテグレーション）へと集約されてきていると分析できる。このことは、わが国においても傾聴に値するものではないだろうか。

＜文献＞

１）国際家族計画連盟（ＩＰＰＦ）発行、"Understanging Adolescents ...An IPPF Report on Young People's Sexual and Reproductive Health Needs"、１９９４、産経新聞１９９４年４月６日（ニューヨーク、宮田一雄）、『世界と人口』、１９９４年５月号、ｐ６２、『世界と人口』１９９４年８月号、ｐ６５

２）国連人口基金（ＵＮＦＰＡ）発行、POPILI、Vol 20、NO11／Vol 21、No12、December 1993、January 1994、Special Issues：ＡＩＤＳ、pp.８～10、『世界と人口』、１９９４年９月号、ｐ３２～３４

３）「カイロ会議の成果：世界人口の行方」、人口フォーラム２１特別講演、ナフィス・サディッック国連人口基金（ＵＮＦＰＡ）事務局長、１９９４年１０月２７日、『世界と人口』１９９５年１月号、ｐ６～１３

４）世界銀行レポート１９９５年５月１４日、『世界と人口』１９９５年７月号、ｐ７３

５）ＷＨＯニュース・リリース１９９５年８月２５日、『世界と人口』１９９５年１０月号、ｐ６６

６）ＰＡＩニュース・リリース１９９５年７月２４日、『世界と人口』１９９５年１０月号、ｐ６５

２．中南米地域の現状（北村・鈴木・池上・加藤）

一般的にラテンアメリカ・カリブ海地域はカトリック文化の影響を受けて、マチズモとマリアニズモという二重規範的な性役割観、そして、セクチュアリティーについての情報とサービスの不足が結果的に十代の望まない妊娠の原因と考えられている。

その望まない妊娠・出産は、特に女子を学業・経済活動から疎外して、彼女たちの自立を妨げ、また、大抵の場合、違法である人工

妊娠中絶手術を受けた際には、将来の健康を害される可能性も高い。

そして、近年のエイズの急激な広がりは十代の若者たちの健康と将来をさらに危なくしている。

こうしたほぼ十代の無知からくる望まない妊娠やエイズ感染を予防する最強のワクチンは、ＩＥＣ（Information, education and communication ）と呼ばれるヒューマン・セクシュアリティーに関する「教育活動」であることが中南米地域で思春期保健を推進するものたちの共通の認識である。

こうしたラテンアメリカ・カリブ海地域のニーズに応えて、ジョイセフは、国連人口基金（ＵＮＦＰＡ）、国際家族計画連盟（ＩＰＰＦ）、わが国外務省の支援をうけて、以下のような活動を展開している、それらは、

① 思春期の意識調査、
② 思春期保健教育用教材の企画・制作
③ 思春期保健教育関連の人材養成等である。

ここでは、それらの活動をとおして得られた事例をとりあげるものである。

別項に、各教材の分析を行い、わが国での応用についての可能性も探るものである。

（１）メキシコの事例

日本やラテンアメリカ諸国だけでなく、どの国にも共通している親の態度のひとつに、自分の子供（１０代）に限って婚前に性的関係をもつなどあり得るはずがない、と信じていることである。しかし、これは、現状認識からいうと大分掛け離れた幻想あるといわざるを得ない。思春期保健を不要だと思う親に対して、１０代の現状のデータを使いながら説得しても、まだ、「わが子に限って」と思っているのである。

メキシコの場合の突破口は、思春期保健の必要性を毎日感じていた教師たちであった。特に、中学・高校の教師たちは、思春期保健を教えたくても適切な教材がない、どんなアプローチが最も良い方法かと模索していたのだ。

新しいアプローチとして、メキシコ家族計画協会（ＭＥＸＦＡＭ）を中心に構築されたのは以下の要点を含んだものである。

①イコール・パートナーシップを促進するために男女間の良いコミュニケーションを図ること。男性優位主義（マチズモ）が強い文化的背景を踏まえて、必ず男女一緒に思春期保健教育を実施すること。

②トータルな人間教育ということを踏まえて、パートナーに対する愛情、思いやり、責任と同様に、人生設計や社会参加（女性の自立を含む）の重要性を伝える。特に、女性が自分の体をよく知り、自分で自分の健康を守る意識をもち、妊娠、出産（不妊もふくめて）に関して、自分の人生設計の一環として考え、決めていこうというリプロダクディブ・ヘルスを前面に押し出すこと。

③１週間に５回・各回は２時間程度のシリーズを思春期保健の短期集中コースとする。１０代特有の心理的・肉体的な説明の後、最後にまとめとしてアニメーションや映画教材などを使って小グループで話し合う。
④妊娠・出産などの性に関する知識は、断片的な情報でなく、訓練を受けたコーディネーターを通じて正確な知識を提供する。この時、１０代参加型の小グループでの討論法を採用する。特に、テレビ、雑誌や友人から得ている情報と実際の性行為時に、相手に対する思いやりある行動がとれるかどうかの間には、大きなギャップがある。このギャップを埋めるには、１０代の間での話し合いを効果的に進めて他人の話や事例、質問などに自分の行動を投影する方法をとり、小グループでの話し合いを１０代自らの参加で実施する（ピア・エデュケーション）。
⑤第三者であるコーディネーターの養成が必要である。先生や親には相談できないことでも第三者には相談し易いからである。それには、家族計画プロジェクトに携わっている人材に対して、このアプローチに関するトレーニングを実施することにより既存の経験豊富な人材を活用できる。その際、性についての暗いイメージを払拭して、性を明るく楽しいものとして捉えることが肝要である。また、エイズ予防等にも言及するような内容にすることが求められる。
⑥大人の考えを押しつける方法ではなく、１０代の視点にたつこと。「望まない妊娠を避けるには性的関係を持たないことが一番よい」といった従来の大人の価値観ではなく、実際に性的関係があるという現実から出発すること。
⑦話し合いを導くための足掛かりとなる教材が必要である。１０代の参加を得るためにも１０代によってプリテストされた、１０代に受け入れやすい作品が望ましい。今までの教材は、科学的に妊娠・出産を扱っただけの生物学的な教材が多く、１０代に受け入れられる基準からは程遠いものばかりであった。よりヒューマンタッチの濃い教材（ストーリー性のあるもの、心理面のインパクトを考えた教材）が求められる。
⑧学校、コミュニティーセンター、企業体や軍の協力を得て教育の場を確保すると同時に、思春期保健教育の重要性について、事前に親やコミュニティーのリーダーたちに理解を得ることが不可欠である。

などに留意したアプローチがとられたのである。

メキシコ家族計画協会が、問題提起型の教材を使って、十代妊娠防止をふくめた思春期保健教育の一環としてＫ（知識）、Ａ（態度）とＰ（行動）のギャップを埋めることをめざした上述の斬新なアプローチは、メキシコで次のような実績をあげた。

①対象年齢別に、３本のアニメーション教材が制作された。スクリプト、ストーリーボードなどの各段階で１０代の参加を得て制作されたもので、１２歳対象の「青い鳩」、１６

歳対象の「二人の調べ」、２０歳対象の「新しい関係」の３本である。

②コーディネーターが、親や教師とは異なった第三者として、中立の立場から１０代の相談にのった。従って、情報提供といった一方通行ではなく、１０代の両面コミュニケーションが成立した。コーディネーターによる個別のカウンセリングも副次的効果をあげた。

③具体的に教材を使ったアプローチを採用した高校（メキシコ市）では、一年間の成果として、その前年に２０人の妊娠による中退者があったにもかかわらず、一人も中退者がでなかったのである。また、「トイレの落書きの多くは性的な表現（特に女性への性的虐待表現）であったが、このアプローチ実施後は、この種の落書きは激減した」と教師は成果を語った。また、女子高校生は、「ボーイフレンドと以前よりも率直に性のことや、仕事をもつこと、近い将来のことなどを話し合えるようになった。」とインタビューに答えてている。

④メキシコの最大テレビ局より、この３部作を放映したいと言う依頼があったがそれを断った。この教材が話題になったことの証拠ではあるが、断った理由は、一方通行のマスメディアでは、このアプローチの効果が期待できないからである。

⑤この教材は、その後、ＷＨＯがラテンアメリカ地域各国に配布したこともあり、問い合わせが、アジア、アフリカからも寄せられ応用されている。思春期の若者の求めているものは，地域を超えて共通項があるのではないかと推測できる。わが国にも十分応用可能な部分を含んでいるといえる。

（２）ブラジルの事例

ブラジルでも、他のラテン・アメリカ・カリブ海地域諸国と同様、十代の「望まない妊娠」は大きな社会問題である。十代における妊娠・出産は、母子の健康に悪影響をもたらすということのみならず、学校や就業の継続を困難とさせ、収入を得るチャンスを減らし、貧困化を促進するからである。では何故、十代の望まない妊娠が多く起きやすいのか。そして、また、それを防ぐにはどうしたらよいのか。

ブラジルを含めたラテン・アメリカ文化の中に、十五歳を意味する「キンセ・アニョス」という女性の成人式にあたる祝いごとがある。十五歳の誕生日を境としてそれ以後「大人の女性」として認知され扱われるのである。それは、しばしば「ボーイフレンドを自分の家に連れてくることを両親に許される」と言う言葉で象徴される。伝統的な女性らしさや性役割が強調され始める時期でもあり、男性優位主義文化である「マチズモ」を裏から支える慣習であるが、これによって十代の性交渉が促進される傾向がある。このように一見、

異性関係についてオープンでありながら、一方カトリックの強い影響があり、生殖器官や生殖過程、避妊法についてはオープンに語れない雰囲気がまだ根強い。こうした相反する二つの性文化の中で正しい知識や情報に乏しい若年層の女性に「望まない妊娠」が生じやすいということになる。つまり、「望まない妊娠」を予防するためには、既に性的な活動が活発になっていることを前提にしたうえで、性に関わる正しい情報・知識並びにサービスの提供が必要ということになるが、どのような教育方法で行われるのが最も効果的かということが次の問題となる。

ブラジルのサンパウロ市でみた、心理相談員のアンジェラの性教育を紹介しよう。

彼女は、そのアプローチとしてロール・プレイング法を採り入れていた。役割演技法とも言われ、自分以外の誰かを演じることによって他者の心情や行動を理解する能力を高め、そこで得たものを自分のパーソナリティーや、今後の行動に反映させるために用いられる心理学の分野で開発された手法である。

アンジェラは、集まった子ども達を男女混合のいくつかのグループに分け、次のような課題を与えた。

「未成年の男女が愛し合った結果、女の子が妊娠してしまいました。さて、どうすると思いますか。グループでストーリーを作って、それを劇にして演じてみて下さい」

１５分ほどグループで話し合った後、発表会が始まった。始めのグループは結果として中絶を二人の同意として選んだが、それは二人にとってつらい経験となり、それからは避妊に気をつけるようになったというストーリー。二番目のグループは中絶も考えたが、そうできず結局生んでしまい、里子に出したというストーリーだった。即興の劇にもかかわらず、子供たちはなかなかの役者ぞろいで、時折ユーモアを交えながら演じていく。

すべてのグループが発表した後で、アンジェラは子供たちが間違って認識している点についてコメントしたり、劇中出てきた避妊法について詳しく説明を加えたりする。そして、最後にフォローアップという形で各グループがもう一度演じなおす。アンジェラがしていることは、望まない妊娠・出産をロール・プレイングを通して疑似的に子供たちに体験させる予防教育なのである。このクラスを通じて、子供たちが自然にコンドームやピルを使えるようになってほしいとアンジェラは語った。

男女が一緒になってロール・プレイングをすることによって、本来ならば男子にしか感じられないこと、女子にしか感じられないことがお互いに伝えられやすくなっている。このことは、教育学的に特に目新しいことではないように感じられるかもしれないが、同じことが果たしてわが国でできるか疑問である。

このような試みは、実は、サンパウロ大学の産婦人科思春期外来の実験的活動から始ま

っているが、１９７２年から活動しているその経験の蓄積の上に進められている。当時は、このような活動を批判的な目で見るものが多かったと、責任者であるアルベルティーナ医師が話してくれたのが印象的であった。２３年間の人材の蓄積。そして、ここから育っていった多くのピア・エデュケーターたちが、各地で、今活躍している。

息の長い、実践的な人材の養成と適切な教材（この場合は、教条的なものでなく補助的で問題提起型の教材が適切である）の開発が、ここでも重要なポイントであった。

（３）ドミニカの場合

ドミニカ家族計画協会（ＰＲＯＦＡＭＩＬＩＡ）とジョイセフ共催の「思春期保健セミナー」へ講師として参加した。

米国国立防疫センター（ＣＤＣ）とメキシコ家族計画協会（ＭＥＸＦＡＭ）がセミナーの実施にその準備段階からジョイセフに協力してくれた。

このセミナーは、ドミニカ共和国の歴史始まって以来最初に実施された「ドミニカ共和国青少年行動実態調査」のハイライトが発表され、当地の青少年の性行動の実態についても明らかにされた意義深いものとなった。さらに、ジョイセフの思春期保健教育活動が、当地においてもあらたに注目を浴びた。

ラテン・アメリカ諸国の十代の性行動についてはいくつかの調査が既に実施されているが、やはり、十代の現実は、ドミニカ共和国も、今回の調査が明らかにしたように、非常によく似た傾向を示した。

ドミニカ家族計画協会と米国国立防疫センターの３年間におよぶ共同調査「ドミニカ共和国青少年行動実態調査」によってこの度、その全貌が明らかになった。更に、

①望まない妊娠、

②非合法の中絶

③エイズを含むＳＴＤ、

この３つが徐々に社会問題化しつつあることも、この調査によって明らかになった。このドミニカにおいても、子ども達の性行動は早い時期から行われている。今回の調査でも、１５～１９歳のうち２８％がセックスの経験があり、最初のセックスに避妊をしたのは僅かに１６％、リズム法、性交中絶法、コンドーム等が主流であった。そして、妊娠した役８割の女子が中途退学を余儀なくされている。

初めてのセックスで妊娠、そして、中退というケースも多くあった。さらに、生まれてきた子供を親や姉妹に預け、アメリカ合衆国へ出稼ぎに出るもの、また、仕送りのため売春婦となるケースもあったと発表された。望まない妊娠ゆえの、余りにも極端な人生の選択ではないだろうか。

中絶の実態については、非合法のこともあり実数は把握できないが、闇の中絶料金は、医師が中絶をした場合、３～８百ドルで、産婆さん（ＴＢＡ）の場合、１５０ドルと言われており、若者達が口コミで、中絶のできる

場所や料金を知っている現実からすれば、かなりの闇中絶が行われていることが容易に想像できる。

ドミニカ共和国も、他のラテンアメリカ諸国と同じで、

・カソリック教会の圧力、

・政府の青少年の性行動実態の認識不足、

・政治家のカソリック教会の支持を失う恐さによる消極性、

などによって、公式的には思春期保健教育活動は全く前進していないといっても過言ではない。　しかし、ドミニカ家族計画教会のような民間では、思春期の実態に合わせた、そして、青少年の真のニーズにこたえるプログラムを積極的に推進している。政府や教会の横車にもめげず、具体的な思春期保健、性教育活動を推進できるのも、若者の絶大な支持を受けているからにほかならない。

ドミニカにおける一部文部省関係者による「思春期保健教室」のための公立学校の土曜日使用許可等の協力もでてきたが、未だ、全国的なものとなってはいない。まだ、サント・ドミンゴ市の一部でその実験が始まったばかりである。

土曜日の午後、私たちは、その活動のひとつである「思春期保健学級」を視察した。１６～１８歳の若者、約４０人が熱気を帯びて自分たちの現状をおたがいに話し合う姿をみて、何故大人たちはこの若者たちの求めているものを与えることができないのだろうか、と日本の状況も含めてつくづく考えさせられた。

かれらは、既に、自分たちで性モラルとはなにかをしっかり話し合っているし、社会や親の立場もよく認識している。そして、さらに、そのうえに、具体的で、適切な情報と自分たちを望まない妊娠や性病から守る知識と情報と方法を求めているのである。まさに、大人や社会の「アクション」をかれらは心から待ち望んでいる。

世界の開発途上国、先進工業国を含めて、１５～１９歳の５～１０％が毎年妊娠しているという。アフリカのある地域では、その率は２０％にものぼる。今、世界に１５～１９歳の人口が５億人であるから、その実数は大変な数になろう。

ここラテンアメリカでは、４千６百万人の十代の年齢層から、毎年、５百万人の赤ちゃんが産まれている。「子供が子供を産んでいる」状況をどうみればいいのか。

思春期の子供たちにとって、妊娠は、肉体的にも、健康的にも、社会的にも、経済的にも、感性的にも、弊害があることは衆目の一致するところである。望まない妊娠、そして、中絶・・・・・この悪循環を断ち切るための協力が今世界中から渇望されている。世界に共通した課題として、議論の時期は過ぎ、具体的で直接的な思春期の若者へのアプローチが必要であることを、この度のドミニカ共和国への旅は、わたしたちに教えてくれた。

（4）エクアドルの事例

１９８９年のデータによれば、エクアドルの１５歳から２４歳までの若者の婚姻前の初めての性体験は、平均１６．６歳である。また、初めての性行為の際に何らかの避妊法を用いた若者は、平均で４．８％と低く、ラテン・アメリカ全体で見ても余りにも低い。加えて、この年代の若者では避妊法としてリズム法を使ったという答えが多いが、調査の結果によれば、同年齢群の女性のうち、月経周期についてきちんと理解しているのは２３％のみである。こうした結果であろうか、１５歳から２４歳の既婚女性のうち２４％が婚前に妊娠している。こうした女性たちが、社会的にも、経済的にも、疎外されていくのは容易に想像できる。それを予防するためにどのような方策がとられるべきかが、エクアドルにおいても大きな今日的な課題となっている。

ジョイセフとエクアドル家族計画協会の共催で、性教育セミナーを実施した。未だに、「性教育」という言葉に抵抗を感じるカソリックの背景も考慮して、「若者とのコミュニケーションのためのセミナー」とした。

ここでは、メキシコでのアプローチの方法が紹介された。

メキシコのヘンテ・ホーベン・プログラムは、トレーニングを受けた若者プロモーターを学校や職場など、若者が生活している場所へ派遣する典型的なアウト・リーチ型性教育プログラム。教材も、オープンな雰囲気で話し合うための工夫がされたものが好ましいとされている。「性」についての正しい情報を増やし、男女間のステレオ・タイプ的な性役割を見直し、「性の自己決定権」の意識を高めようとすることが肝要であるとしている。

教材の性的な描写の部分について、性器が描かれるものについて抵抗を感じるという意見、年齢によって使い分ければ大丈夫という意見、さらに、年少の時からしっかりとした実物教育的性教育が必要である、さもなくば、十代の望まない妊娠やＳＴＤの予防はできないなどの議論が沸騰した。

ラテン・アメリカの問題が、必ずしもわが国の問題とは合致しないと言う意見もあろうが、十代の望まない妊娠の結果として現れてくる現象は、国境を超えて非常に類似性を持っているといえる。十代の若者の問題は、一つの共通項を持つ。それは、彼らの知識の欠如と男女間の性的な行動に関する考え方の違いである。これは、エクアドルであろうと、日本であろうとかわらない。そして、予防的教育が今渇望されていることは、今回の調査で最も明らかになっていることである。それはまた、現在世界的に共通している現象であるといっても過言ではない。

わが国の行政的な施策の中へ、ラテン・アメリカの国々の現実的な対処の中から多くの示唆や応用可能な事例、教材が多数含まれて

いると思われる。

３．アジア地域の現状（鈴木・石井）

アジア地域の十代の望まない妊娠に関する広報教育活動もこの１０年で大きく様がわりしてきた。ラテン・アメリカのいくつかの事例で見てきたように、アジア地域においても、若者の性行動はより活発になっている。

地域を超えた情報ネットワークが同時限的に若者たちに与える情報は、世界中の若者の性行動パターンにおいてもまさに共通項をつくりつつあるといえる。

しかし、一方で、ＨＩＶ／ＡＩＤＳの、アジア地域もふくめた確実な広がりは、十代妊娠の予防とあわせて、重要な要因となり、思春期保健教育ないしは性教育活動に変化をもたらしている。それは、①積極的で緊急的な実際教育の必要性への認識の転換、また、②教材においても性器の直接描写も含めて、より具体的なものへと、それらは世界共通的に変化してきているといえる。

若者たちの性に関するＵＮＭＥＴ　ＮＥＥＤＳ（未充足ニーズ）を充たすために、アジア地域でも多くの取り組みがなされている。それらのいくつかを以下に紹介する。わが国のこの分野での試みにも多くの示唆があるものと考える。

（1）インドネシアの事例

インドネシアでのピア・カウンセリングに、コンドームを使った実際教育が試行されている。モスレムの国における性教育の難しさは、処女性を重んじる伝統的な社会、つまり、女性は、結婚するまで男性との接触をしてはならないし、また、結婚した後も、夫に従順でなくてはならない規範をもつ社会では、到底受け入れがたかったが、若者の実態は、より急速に進んでいる現実がある。

「十代の妊娠」、「ＨＩＶ／ＡＩＤＳ」などが徐々に社会問題となっている背景を踏まえて、先ずは、民間の家族計画団体が、その実態の把握と、予防教育活動に乗り出した。教育省も公立の学校に「思春期保健教育」のカリキュラムを導入しはじめた。「性教育はタブー」と言われた社会に、今、変化がおこりはじめている。

エイズ教育には、どうしても、実践教育としてコンドームの使用についてふれざるを得ない。まだまだ抵抗はあるが、インドネシアでは、ピア・エデュケーションを通じて一歩踏み出した。

インドネシア家族計画協会のピア・エデュケーションの試みはジョクジャカルタ市の１３の公立私立高校から選抜された生徒をピア

・エデュケーターとして訓練して、各高校の核として活動してもらうものであった。教材もかれらが、自分たちに合ったものを自分たちの実際問題をふまえて自分たちの手で作り、それを使っている。

エイズ教育が、「十代の望まない妊娠」の予防教育への促進力となっているとここでも確認できる。

（2）中国の事例

①ラジオ性教育番組：

ラジオの性カウンセリング番組が、人気番組として今、中国で注目を集めている。「ウイスパー（囁き）」と題する、中国上海ラジオ局が、毎日2回、9：45PMと0：45AMに流している番組である。リン・ユンさんが、ラジオのパーソナリティーをつニック、障害者の性生活、中後年の性などとその投書の幅は広い。

ある少女からの手紙「私は自分の部屋でオナニーをしていたところを、お母さんに見られてしまいました。お母さんは、オナニーなんかするものではない、はしたない、などと私を咎めました。私は、死にたい気持ちになりました。」このような悩みに応えて上げることの出来る教育は、まだ身近にないのである。中国では、このラジオ番組の与える影響がとても大きいことが最近評判になっている。リーさんは、「お母さんリー」「リーお姉さん」「リー小母さん」などと呼ばれて、視聴者から親しまれている。

このときの、手紙やリーさんの受け答えが、そのまま本になりベスト・セラーになっているという。さらにはその様子を録音したカセット・テープも同時に販売されていて、活きた教材になっている。さらに、問題を抱えた若者のためにカウンセリング・センターが用意されているし、とくに医学的対応が必要なひとのために、クリニックも開設された。

もうひとつ言うならば、ラジオという媒体を大いに活用した中国の教育活動は、実は、若者の実態をより鮮明に、全国的に伝える一方の役割も果たしているといえる。「儒教の国であり社会主義の国」の若者も苦しんでいる。

②月経の記録運動「ローズ・カード」

リプロダクティブ・ヘルスの思春期早期からの理解を深めるために、さらには「十代の望まない妊娠」の認識を持つための目的をもった月経記録運動が、上海ではじまった。

「リプロダクティブ・ヘルス」の観点からの月経記録からの考え方は、生涯の女性保健を考える上で見逃せないことである。「ローズ・カード（バラのカード）」とよばれた月

経記録カードが上海の小学校でまず配布された。

中国では、一人っ子政策が１９７９年より始まっているが、子供の質の問題が大きなテーマとなっている。その観点から、思春期に対する性教育が両親や学校当局から望まれていたのであるが、残念ながら、母親や学校の教師が積極的に娘を教育することに対する躊躇があった。上海にある、国際人口広報センターが開発し、実験的に始めたこの運動も、いずれ全国展開を実施する計画をもっている。「中国の女性の一生のうち６～７年間は月経期間である。その時期を健康で過ごすことの重要さ、女性が自分で出産を決定する権利を持つことが重要である」との認識が深まっている。上海市当局の力の入れかたは、大変積極的であると観察できる。

（３）マレーシアの事例

マレーシアのペナン島の自由貿易区で働く１０９，０００人の十代の女性を対象に、「望まない妊娠」、「セクハラ」、「ＳＴＤ」、「女性の生き方」などのテーマで思春期のワークショップ（１コース２５名参加）を実施している。

ワークショップの始めには、はずかしがっていた参加者の多くも、ビデオをもとにした質疑応答のセッションになると活発に発言する参加者がふえてくるし、一旦お互いが胸襟を開いてしまうと、あとは自己体験も含めた多くの話題が出てくる。ビデオ教材は、このワークショップにおいては、まさに参加者の心を開くための手段となっている。

月収が平均３３３ドル（３３，３００円）の低賃金労働者である彼女たちのように、妊娠が、すなわち失職という厳しい現実に直面しているものと、学校の中で思春期保健を受けられるものとのギャップは大きい。言い換えれば、彼女たちの場合は、問題の捉え方が現実的なものとなってくるのである。その視点から、このような企業体、工場等を対象にした教室からも大いに学ぶべきところがある。日本のように思春期を学校教育の式にあたる祝いごとがある。十五歳の誕生日を境としてそれ以後「大人の女性」として認知され扱われるのである。それは、しばしば「ボーイフレンドを自分の家に連れてくることを両親に許される」と言う言葉で象徴される。伝統的な女性らしさや性役割が強調され始める時期でもあり、男性優位主義文化である「マチズモ」を裏から支える慣習であるが、これによって十代の性交渉が促進される傾向がある。このように一見、異性関係についてオープンでありながら、一方カトリックの強い影響があり、生殖器官や生殖過程、避妊法についてはオープンなかですごす国とはアプローチの仕方は違うが、扱う素材は、非常に生活に根差したものとなっており、セックスについても、すでに経験的なグループがいて、ピア・

エデュケーションが実施し易いといえる。

ここでも、いえることは、この教育は、性に関するもののみではなく、常に、人生全体の中でいかに自分を大切にするのかということがしっかりとした背骨として流れている。一泊二日のみの講習会であっても、彼女達にとって、とても多くの示唆を与えていると言える。また、これを実施するについて、マレーシア家族計画協会が実施責任機関であり、１９９３年まで無料であったが、１９９４年からは、有料で実施されている。そして、企業が受講料（２００円）を負担してまでも参加させる工場が増えてきたという。

マレーシアでは、民間機関が、思春期保健のよいカリキュラムを用意しそれを有料で実施し、企業や学校がその指導能力に依存するという方法が徐々に一般化してきている。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

一方、わが国における、高校生大学生を対象にした性意識調査では、セックスは男性と女性のどちらが誘ったかの質問に対して、４４％の男性が「自分である」と答え、女性は「自分である」と応えたのは０％であった。「男が積極的で、女は従順」と言う価値感は、文化的、社会的、宗教的背景を取り除いたとしても、日本の思春期の女性の現実が各国・各地域の状況と共通性を持っていることがわかる。このことを考慮にいれると教材についても、他の地域からでも、なお応用可能なものを見出せるはずである。

４．教材紹介

本章でとり上げたわが国で応用可能あるいは参考になると考えられる主なビデオ教材は以下の通りである。

◆「青い鳩」（The Blue Pigeon） アニメーション/ カラー・11分

「青い鳩」のメロディーにのせて少年マーチンと少女マリアナの初めての恋。新鮮なアニメーションによって男の子と女の子の身体の構造の違いや初めて体験する性衝動、性交によって起きる生殖のメカニズムについて描いて行く。音楽と効果音のみでナレーションなしの構成。（制作国メキシコ）

◆「新しい関係・サラとガスパー」（Best Wishes）アニメーション/ カラー・14分

サラとガスパーは愛し合い生活を共にしている若いカップル。二人の生活をしっかりと築くためには、それぞれの自立と、相互理解を導く愛情、経済的な責任に裏打ちされた生活設計をもつ関係づくりが必要と訴える。音楽と効果音のみでナレーションなしの構成。（メキシコ）

◆「ふたりの調べ」（Music for Two） アニメーション/ カラー・13分

少女エルザは、空想の世界でいろいろなタイプの恋愛相手を描きます。女性の立場から、ふさわしいパートナーとしての男性とはどんな人か。性とそれに伴う責任、そして避妊についても触れた教材。音楽と効果音のみでナレーションなしの構成。（メキシコ）

◆「マイウエイ」（My Way）アニメーション/ カラー・13分

４人の女子高校生が、ボーイフレンドと交際し性交渉の機会を迎えた時、それぞれどのような行動を選択していくかを描いている。自分自身を大切にする性的関係とは・・自分ならどの生き方を支持するか、作品を見た後で話し合いをふかめることができる。（タイ）

◆「ラキーとマウシ」（Rakhee and Mausee） アニメーション/ カラー・12分

処刑を迎えるか迎えないかの年齢で結婚し、その後は妊娠、出産、育児、家事労働に明け暮れる南アジアの多くの女性たち。教育の機会を与えることによって、自分の選択の道が拡がる。十代の結婚、早婚の習慣を変えていきたい。（インド）

◆「十代の女・静かな抗議」（Adolescent Women-Voices Unheard） 静止画ビデオ/ カラー・20分

早婚、望まない妊娠、貧しさゆえの売春。それぞれ、バングラデシュ、メキシコ、タイで取材した３人の実在する十代の女たちと、彼女たちの生きる世界をありのままに伝える。開発途上国の十代の女性が直面している問題を提起する作品。

（バングラデシュ、メキシコ、タイ）

◆「ＣＨＯＩＣＥＳ」（選択） カラー・ 4分

思春期をどのように過ごすのか。望まない妊娠やＳＴＤから如何に自分を守るのか。避妊の方法はどんなものがあるのか。選ぶのはあなた、と言うメッセージを歌と踊りで若者に訴えている。ジャマイカのテレビ局が、スポットで流している今若者に最も親しまれている思春期保健ソングである。（ジャマイカ）

◆A Fatal Temptation--Perniciousness of STDs and their Prevention and Therapies （致死的誘惑）カラー・45分

ＳＴＤを直截的に映像化した教育ビデオ。各ＳＴＤの病理、治療法が紹介されている。予防教育についても扱っている。性器がそのまま映像化されており。中国でＳＴＤの教材として注目を集めている。実際にテレビでも放映された。（中国）

◆The AIDS pressing Chinese Close カラー・４５分

エイズの恐怖、実態、感染についての教育映画。中国におけるエイズ対策は、今までの教材作りを変えている。より直接的な表現を

多く使うようになってきた。世界エイズ・デーのときには全国放映された。（中国）

◆Proud to be a Girl（女の子であることを誇りに）：アニメーション・カラー・１０分

初経について、伝統的なモスレムの社会では不浄なものとして扱うことが一般的であったマレーシアでは、女性に子供の時から月経を女性として誇りに思うことだと教えている教育素材である。（マレーシア）

◆Raindrop（雨粒）アニメーション・カラー・10分

二人の少女の人生の選択をテーマにして、自分でプロフェッショナルな医師になっていく少女と十代で結婚し、沢山の子供を生んだ少女の人生の過ごし方のちがいを紹介し、自分で選択する力を持つように教えている教材ビデオ。（ベトナム）

◆モニの画期的な事件(Moni's Milestone)カラー・10分

伝統的な男性優位の価値観が支配するバングラデシュの農村。モニは13歳で結婚した。初経のあったのは結婚後、半年してからだった。その時、女は不浄だと教えられた。14歳の今、モニは自分のことを考え始めた、「子供を産むなら男の子がいい。女は幸せになれないから。」思春期を嫁として過ごすモニを中心に、人生を考える絶好の教材である。（バングラデシュ）

◆しあわせに満ちた日々に(Golden Years of Happiness) カラー・23分

家族計画の必要性をとき、具体的な方法と体内でのメカニズムを示し、有効な避妊法などを分かり易く解説している。（タイ）

５．提 言

以下に、ジョイセフの国際協力活動から得た、日本において応用可能な提言をまとめてみたい。

提言１：実態の把握と教育活動：

世界の十代の望まない妊娠防止に関して先進的に取り組んでいるいくつかの事例を見てきたが、それぞれの国の状況とわが国の状況の背後には、文化的、社会的、宗教的あるいは経済的な差異が確かに認められる。しかし、それが、わが国の状況が他の国々と比べた時に、何もしなくて良いという結論には決してならない。むしろ、わが国の行政関係者は、その実態の把握についていまだ消極的である。十代ののＳＴＤ（クラミジア等）の感染率の急上昇をみるかぎり、十代の性行動は活発化しており、まずその実態の把握が急がれると考える。

十代の望まない妊娠やエイズ感染は、ほとんどその無知からくるか、その情報不足からくる。それらを予防する最強のワクチンは、

ヒューマン・セクチュアリティに関する「教育活動」であることは、世界中で思春期保健を推進するものたちの共通の認識である。教育活動の推進の強化が強く望まれる。

提言２：ピア・カウンセラーの養成：

思春期の若者の、世界における共通項は、相談する相手を求めていることである。しかし、あくまでも、セックス、妊娠、中絶などの極端にプライバシーの領域に入ることの相談相手は、畢竟かれらが自ら選択する者になる。わが国においても、望まない妊娠のとき、中絶について相談にのるのは「友人」がおおい。このことを踏まえると、カウンセリング態勢のなかに、「ピア・カウンセリング」のしっかりとした機能を持つことが重要である。親でもない教師でもない、若者にとって同世代の身近な「ピア（仲間）」が相談にのってくれる。また、そのような事態になるまえに、かれらの性に関する気軽な相談相手であり、心を開くことのできる「ピア」の養成が急がれる。中南米の多くの国々は、深刻な「十代の望まない妊娠」のための多くの手段が用いられているが、「ピア・カウンセラー」の育成が最も重要視されている。

言い換えれば、思春期保健プログラムはすべての段階で、若者たちの視点が反映されたものでなければならない。また、「性・セクチュアリティー」についてのメッセージは、大人から若者と言う経路よりも若者間ではるかに伝達されやすく、正しい情報をもったリーダーを多く養成し、かれらを軸に活動を展開していくのが有効である。

提言３：心理相談員とのタイアップ：

とかく思春期保健と言うと、医療従事者、それも産婦人科の医師、看護婦、保健婦などの身体的なアプローチに傾きやすい分野の人々の領域に思われがちであるのが、わが国の思春期保健の領域のように思われている。しかし、わたしたちが、本研究で見てきたように、実際に、思春期の最初で最後の相談相手は、実は人間の心の痛みのわかるひとである。

心理相談員は、わが国においては、どうしても治療的な分野に位置づけられているが、本来の活動領域は、予防的な分野にこそあるのではないだろうか。その意味で、思春期の相談業務に関してはこの分野の人材とのタイアップが重要であることを私たちは、多くの例を見てきた。もちろん、医学的な専門家のフォローアップは必須のものであることは言うまでもないが、協力態勢の確立が望まれる。

提言４：教育指導用教材の開発：

この章の目的は、教育指導用教材の開発のわが国への応用可能性について探ることであった。以下のような提言が可能である。

①教条型の教材ではなく自ら考えることのできる教材の開発：

ジョイセフがメキシコとの協力で開発した思春期保健のアニメーション教材の特徴は、ナレーションがないということである。それは、みたあとのディスカッションと指導員との問題把握および解決への糸口を探るための導入とした点にある。自らの問題をオープンにすることのブレイク・スルー（解凍）にもなるし、それを親とこどもたちが同時にみて、問題の捉え方を発見することにもなるなどの利点を持つことが証明された。言い換えれば、若者の性に対する自主性を産み出す工夫が必要である。

②エイズの影響：

エイズを含めたＳＴＤの蔓延は、今や教材の扱う領域に大きな変更を余儀無くされている。換言すれば、より直截的な表現を求める教材が増えていることである。いまだ決定的な治療方法が発見されていないエイズ予防のためのコンドーム教育が実施されているし、望まない妊娠を予防するための避妊教育も、宗教的な束縛などを乗り越えて実施されている。そして、それらを実施するための教材についても、意外な早さで、性行為あるいは性器の描写の扱われるものが多くみられるようになった。むしろ、直截的教育を施された若者の方が、自分の行動に責任を持つし、男女間のコミュニケーションも良いとの結果が出ている。日本においても、いわゆる「おしべ・めしべ」教育から実際的な教育教材の開発が望まれる。コンドームの正しい装着の仕方の教材は未だない。

③コンピュータ・ネットワークの活用：

アクセスの方法おいて、日本における電話相談も着実に定着してきている。しかし、現在の、コンピュータ・ネットワークの時代においては、若者の２人に一人がパソコンをもつ時代が到来しようとしている。ひとりひとりがかなり閉鎖的な空間に自分をおく時代背景を考えると、性教育に関する地域ネットワークへのアクセスを持つことは大変重要になってくる。この点では、保健所の機能の一つとして考えてもよいのではないだろうか。

④エンターテイメント型へ：

中南米では音楽を一つの媒体として、教材がつくられることがおおい。ジャマイカでの例もあるが、歌と踊りの中に十代の望まない妊娠のメッセージを織り込む工夫をしたテレビのスポットが大変な人気を得て、若者の間でくちづさまれている。わが国においても若者の心を捉える音楽はたくさんあろう。しかし、その題材に十代の望まない妊娠をあつかったものがあるだろうか。

⑤教材の併用について：

映画、ビデオ、ポスター、リーフレット（冊子）など多くの教材をみると、どれひとつとして単独で完璧なものはないといえる。

混合型で使用することが最も望ましい。さらに、適切な指導員が補足をし、個別の相談にきちっと対応することが望まれる。

提言５：男女混合教育の必要性：

セックスのポジティブな面も含めて、男女が混合で教育を受けることが最も望ましい。異性に対する思いやりの育成にも通じるし、お互いのコミュニケーションにおいて利点が多い。そこで、早期思春期からの混合教育が望ましい。小学校の低学年からの教育がその恥じらいをなくすことが証明されている。当然、「ピア・カウンセリング」の理念の重要なひとつでもある。思春期は人生設計の基礎をつくる大変重要な時期である。その意味で、男女間の人間関係に責任をもって行動することの基礎的環境をつくる重要な一歩になるからである。

提言６：厚生行政と文部行政の協力：

いくつかの国で最も注目されるのが、厚生行政と文部行政の協力である。中南米などの諸国ではカトリックの影響を受けやすい文部行政は大変保守的であるが、それでも、文部行政がこのままではいけないという緊急性を感じた場合には、協力態勢が組みやすい。あるいは、かれらが全面的に厚生行政にこの性教育の部分を委託してしまうようなことも考えられている。つまり、性教育や思春期保健の専門家が、学校に招かれて、特別講師として、「ピア・カウンセリング」を実施するのである。この方法は、わが国においても、大いに応用可能である。つまり、保健所や市町村の医師、保健婦、助産婦などの経験と技術を、学校教育の中に提供することで、避妊指導も含めた対応が可能となる。まずは、こんな協力が、補完的に実施できよう。さらにいうならば、この方法は、既存の人材の効果的な活用であり、いますぐなくとも、先進的な考え方をもつ医療機関でも可能である。つまり、問題把握と実践が共存している機関やそれを運営している責任者のいることが重要である。

提言７・民間機関の活用：

行政の水先案内的な役割を民間機関に担わせることは必要かくべからざることである。一つの教材を作成するについても、新しいカリキュラムを構築するについても、常にプレテストが必要であろうし、また、そのためにも蓄積された経験やノウハウが重要になってくる。先進的な民間機関を活用することにより、より効果的な事業の展開が見込まれるのである。地域によっては、民間機関でなくとも、先進的な考え方が持つ医療機関でも可能である。つまり、問題把握と実践が共存している機関やそれを運営している責任者のいることが重要である。

提言８・セックスの捉え方：

ジョイセフの思春期保健のラテンアメリカでの活動の経験の中から得た提言の一つは、「セックスは人生の中の素晴らしい要素のひとつ」という捉えかたである。教師、親、十代の若者等全てが、より正直に、より人間的に、性の問題について直面することによって問題解決の方法を模索することができるからである。

提言９・教材の共有：

今回の教材に関する分析で、多くの教材が地域や国を超えて応用可能であることがわかった。つまり、教材を共有することで、制作コストを下げることも可能であり、制作のダブリも防ぐことができく。わが国においても、教材の洗いだしを行い。各行政の枠を超えた使用上のネットワークを作ることが出来るのではないだろう。

提言10・マスメディアの協力：

常に問題になるのは、マスメディアの性描写やセクチュアリティーの捉え方である。わが国ほど社会問題かしている問題に対して、消極的なマスメディアも世界的にみてもすくないといえる。問題を抉るだけのマスメディアでなく、それを解決していくための方策をだすメディアとして成長してほしいし、マスメディアの協力は、実はこれほどの情報社会ではなくてはならない協力である。十代の妊娠予防のための全国メディアキャンペーンや性教育の番組を常に定期的に流すメディアがあっても良いのではないか。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

『十代の望まない妊娠防止対策に関する研究』

Ⅲ.十代の望まない妊娠対策に先進的な国々における、教育媒体の 収集と活用法に関する研究査